

木本は稀である。例「……令口種一株楡、百本葱、五十本葱、一畦韭。」(賈思勰・齊民要術序)……

「本」は植物を量るといふのは、上古語の踏襲であつて、書籍を量るに「本」を用いるようになったのは、南北朝に新しく興つた用法であつて、これ以前には多く見られない。起源からいへば書を量る「本」と、植物を量る「本」とは同じくはないのであつて、植物の「本」は直接的に「根本」の義から引申して出てきたものであり、書を量る「本」は間接的に「本源」の義が引申して出てきたものである。

「祐見菩薩地經一本」(梁・釈僧佑文)、「河北此書家藏一本」(顏氏家訓・書証篇)……以上「書」を量るといふのは南北朝期にすでにかなり流行したのであるが、まだ本當の陪伴用法(一本書)は見受けられない。また次の「衣服」を量る用例は極めて少ないし、後世には発展しなかつたのである。例「唯裝復袂衣各一本」(隋書・武帝記)。「本」が量詞としてここまで発展した結果、それ自身の本義は完全に解体してしまつたのである。ある人は「本」が書の量詞であるという用法は、唐代になつて始めて開始されたものであるといふが、これは歴史事実と符合しない説である。

以上が劉世儒著『魏晉南北朝量詞研究』の概要の紹介であるが、特に緒言ならびに総論を中心として、漢語の特色の一つである量詞の類系、語法特徴、分化の情況、結合法則、洵

汰の過程ならびにその限界点についての論述をみてきたのであるが、この種の論文に必ずといつてよい程みられる著者独特の語法用語について、この論文もかなり新しい用語を使用している点は、読者にある種の抵抗を感じさせる。また資料中の該当字を量詞と断定するための手続きや、その基準について、やはり今後の研究に待たねばならぬ点はあつたが、しかし漢語量詞の發展史のなかにおいて南北朝期をその大きなポイントとした点については、従来の唐代説(王力)よりも進んだ卓見であると思われ、資料篇とも目される第二章以降の価値は高く評価されてよいと思われる。

(一九六六・三・一〇)

(北京・中華書局・一九六五・二七七頁・B6版)

広祿・李学智著

### 清太祖朝「老滿文原檔」与「滿文老檔」 之比較研究

神田 信 夫

滿文老檔が清初史の根本史料として、また滿洲古語の貴重な資料として価値の絶大なことは、いまさら言うまでもない。一九〇五年わが内藤湖南博士が始めてこれを盛京宮殿崇禎閣において発見されたが、その後一九三一年に至り北京の故宮

博物院にも同種の別の稿本が存在することが知られた。しかしそれはいずれも乾隆年間に新たに改写されたものである。ところが北京の故宮では、それらのオリジナルであるいわゆる原檔なるものが同時に発見された。この原檔は三十七冊より成るが、ついで一九三五年には別に三冊の旧檔も発見されたのであつた。いずれもすべて入関前に書写された極めて古い檔冊で、満文老檔の書誌的研究には勿論、老檔の記事を資料として利用するにも、オリジナルとして溯つてぜひ参照しなければならぬものであることは言うまでもない。原檔の発見された当時、謝国楨や方甦生ら教氏によつてその簡単な紹介が行われ、僅か数葉ながら写真も掲載され、わが鴛淵一博士など北京で実物を見られたのであつたが、未だ詳細な紹介や整理研究のなされないうちに戦争が勃発し、その後は杳として存在が知られなくなつた。しかし原檔の存否は満洲史学界の重大な関心事であるので、故宮の貴重な文化財と共に南遷して台湾に現存するとか、不幸にも戦禍によつて消滅したとか、或は北京の某処に極秘裡に保管されているとか、いろいろ噂されていた。だが幸なことに、やはり台湾に遷つた故宮博物院の倉庫の中に無事保管されていたのである。台湾大学の広椽及び李学智の両氏が、先年これを台中の故宮博物院で苦心して見出されたのであつて、先ず原檔の現存を慶賀するとともに、これを再発見された両氏の功を多としたい。

批評と紹介 神田

さて広椽氏は現在中華民国立法委員で台湾大学教授を兼ねていられるが、元來新疆イリ出身の満洲人で、今でも家庭では満洲語を使つておられる。その経歴については、一昨年刊行された同氏の著書「広椽回憶録」（文星叢刊七二）に委しい。李学智氏は台湾大学図書館に勤務の傍ら、広椽氏について満洲語を学んだ篤志家で、「大陸雜誌」などに幾篇かの論文を発表されている。今日台湾における満洲語の權威である両氏が、原檔について数年間刻苦精勵して研究された成果の一部が、ここに紹介する論文である。

本論文は本文一六五頁、アート紙の図版一六三頁という大冊で、図版はわが東洋文庫刊の「満文老檔」から転載した二葉を除いてすべて原檔の写真である。本文で問題にした原檔の個所が悉く図版に収められており、これだけ多数の原檔の写真に接し得ることは、従來僅か数葉しか紹介されていなかったのに比して全く隔世の感がある。ところで本文は三部に大別され、第一部は「老満文原檔与満文老檔」と題する。先ず初めに、戦前原檔について紹介した文献叢編や謝国楨、方甦生、張玉全、李徳啓らの諸氏の記述の誤りを、新たに原物に當つた結果に基づいて指摘した後、「満文原檔簡目」を太祖朝と太宗朝とに分けて作成している。この簡目は、初め発見された三十七冊の原檔と、ついで発見された三冊の原檔合わせて四十冊について、記事の年月順に編次したもので、甚

だ有用である。元來三十七冊の原檔は、乾隆朝に重鈔された満文老檔のテキストであつて、乾隆六年に裱装され、そのうち一冊を除いて残りの三十六冊には千字文の字号が天から露まで（康熙帝の諱を避けて文の字はない）各冊に付けられている。しかし太宗朝の首冊に特に天の字号を付けた外は、全く順序不同なのである。広・李両氏はこれに別の三冊を加えて再編し、第一冊から第四十冊までの新しいナンバーを付け、各冊について千字文による原番号や故宮番号、所収記事の年月、内編号数、頁数、紙質、字体、紙の大きさなどを記したのが今回の簡目であるが、乾隆重鈔の際に太宗の天聰二年五月の条に入れられていた蔵字檔を特に天命八年のものとして断ぜられたのなど注目に値しよう。原檔すべて四十冊の内訳は、太祖朝二十冊、太宗朝二十冊である。

これまで原檔についての紹介は、極めて簡略なものに過ぎなかつたが、両氏の研究の結果、始めて詳細が明かとなつた。すなわち太祖朝二十冊の原檔は決して一様ではなく、十一冊は明代遼東各衙門の旧公文書に書かれ、しかもその内の一冊（第十五冊）は印刷されたものである。残りの九冊は高麗紙に書写され、その大半は後日重鈔されたものという。そしてこの兩種の檔冊の記事に相互に重複があるばかりでなく、それぞれの種類の檔冊の間にも記事に重複がある。また明代の公文書を用いた檔冊の記事は日記体で、天命六年二月

から始まるのに対して、それ以前の記事を取める第一・二の両冊は記事本末体で、高麗紙に書かれていて大きな相違がある。高麗紙を用いた他の七冊は、明代公文書に書かれた記事を或る意を加えて重鈔したもので、要するに高麗紙の九冊の檔冊の重鈔は、太宗の天聰三年から七年の間に、太祖実録編纂の準備として行われたのであらうと推測されている。原檔の成立の究明は、まことに重要な課題といわねばならない。なお両氏は、原檔四十冊をすべて老満文原檔と呼ぶとともに、明代の公文書を用いた太祖朝の十一冊を真正老満文原檔といひ、高麗紙を用いた九冊を単に老檔なども称されているが、乾隆朝重鈔のいわゆる満文老檔と混同しやすい。何か適当な称呼を定める必要があらう。

さて広・李両氏によれば、原檔の記事と乾隆重鈔の満文老檔の記事を比較すると、清朝にとつて都合の悪いような記事は削除してあるという。その一例として列字原檔第十三号の削除された記事全文が紹介されている。ただ両氏はその記事の年月や前後の記事を記していないが、両氏の簡目によると、列字原檔は天命八年正月から五月までの分であるから、満文老檔に当つてみると、前後の関係から同年正月の記事であることが知られる。両氏はこの記事が太祖の苛酷さを示すので乾隆朝に故意に削除されたとする。確かに図版五十四に載せられている原檔の写真には、記事全体を墨の枠で囲んであ

る。写真だけでは、この枠が何時つけられたのか判らないが、長い記事を抹消する場合にこのような枠で囲むことは、前に私が本誌に紹介したロンドン大学所蔵の満文元史の稿本をみても明らかのように、清の極く初期から行われていた方法であるから、この枠が乾隆朝につけられたという証拠がない限り、両氏の如く軽々しく断定できない。両氏の簡目によれば、列字原檔は明代公文書に書かれたものであり、それと重複する記事が高麗紙に書かれていて、冬字老檔にあるという。いま問題の記事が冬字老檔にあるのか否か、両氏は全然触れていられないが、もしないのであれば、いよいよ乾隆期に抹消したとは思えない。この枠は他の書入れや訂正と共に夙につけられていて、乾隆朝の重鈔の際には、むしろ忠実にテキストに従ったので、この記事が改写されなかつたのではなからうか。いつたい両氏の議論は、原檔の史料的价值の絶大なを主張するに急な余り、乾隆朝の重鈔の意義を不当に低く評価する感がある。乾隆朝の重鈔には、後述のように無論杜撰な点が間々あるけれども、しかしその功績は高く評価されねばならない。今日原檔を判読するのに、乾隆朝重鈔の満文老檔が如何に重要な手がかりをなすかは、更めて説くまでもなからう。

次に両氏は、原檔にみえる無圈点の老満文の字体を掲げて、その有圈点の新満文字体と対照し、それぞれローマ字に

転写している。ただ老満文のローマ字転写法には、新満文のメルレンドルフ式の如き定式がまだない。最近わが池上二良氏も無圈点字書の研究をされて、無圈点字体の転写を試みていられるが、原檔のように歴大な老満文の資料が現われると、何か共通の転写法を考える必要があるかと思う。その他、両氏は原檔に関連して清初史に関する見解をいろいろ述べていられるが、その紹介は割愛する。

さて本論文の第二部は「略補乾隆重鈔本満文老檔中之原檔残欠」と題し、頁数も百頁に近く、全体の大半を占めている。周知のように乾隆朝重鈔の満文老檔には、「原檔残欠」と墨書した黄簽が貼付されているが、これは重鈔の際、原檔の文字が破損等によつて不明であることを示すもので、原檔に極めて忠実な重鈔の一証とさえ言われていたのであつた。ところが両氏が実際に原檔に当つてみると、乾隆帝の刪改や故意の漏鈔以外に、疏忽のために発生した漏鈔の文が随処に見られるという。また重鈔者の怠慢から、重鈔に困難な個所に遇えば「原檔残欠」の文字を附して逃げるという無責任な例や、原檔が重複して一方で補うことが可能であるのに、その労力を省いて「原檔残欠」としてしまつた例が多いという。

こうした原檔残欠について、両氏は問題のある個所三十数例の文を挙げてゐる。ただ残欠の個所だけでなく、その一段

の全文について、先ずローマ字に転写した乾隆重鈔本の満文とその逐語漢訳を列挙し、次に原檔のローマ字転写と逐語訳を掲げ、最後に原檔の漢訳文を載せるといふ念の入れ方である。そして問題点を註記するとともに、各一段全部の原檔の写真を巻末の図版に収録しているので、原檔の実態がよくわかる。両氏の挙げられている三十幾つかの例をみると、原檔残欠とあるのに実際は全然残欠していない場合もあり、残欠といつても字形がいくらか残つていて前後の関係から大体判読できる場合もある。また原檔残欠は、普通は一語乃至数語の例が多いが、時に長文脱落していることがあり、一枚完全に脱落していたのを、無年月の散頁の一片で補われた(一一八頁)のなど、両氏の大きな功績といふべきであろう。その他、乾隆朝の重鈔の際に判読を誤つた例や、原檔残欠の黄簽がなく、事実原檔に残欠がないのに、かなり長い文が脱落している例(九二―一三頁)もある。また原檔に一応抹消している箇所でも、もとの文字が判読できる場合があり、そういう例も挙げられている。ただ太祖朝の原檔と満文老檔とを対比して問題のあるのは、ここに挙げられた三十数例がすべてなのか、或はそれは単に一端を示すに過ぎず、他に同様の例が多数あるのかは明言されていないが、これらの例だけみても、原檔が如何に貴重な存在であるかが充分理解される。それにつけ満文老檔にみえる原檔残欠の全部について、その実

態を示して頂きたいと思う。

本論文の第三部は附録で、「清太宗初設六部考実」と題して、現に中央研究院歴史語言研究所に蔵する天聰五年七月八日附の「ninggun jurgan be toktobuha dange」すなわち「六部制定の檔子」というタイトルのついた全冊無圈点老満文の檔冊を紹介している。両氏はこの檔冊の全文について、前述の原檔の場合と同じく先ずローマ字に転写して逐語訳をつけ、次に漢訳を載せ、併わせて内容の解説を試みていく。天聰五年七月始めて六部が設立されたことは、太宗実録にみえている。その際制定された六部の官制定員等については、実録始め後世の清通典以下、清史稿等に至るまで一応記述があるとはいへ、必ずしも明らかでない。ところがこの老満文の檔冊には、各部の定員が詳しく記されていて、殊に各部の参政(両氏はこれを侍郎というべきだと主張されている)を満八人、蒙四人、漢二人計十四人とするのや、戸部に倉長及び課稅長があり、各部にニル単位で章京や差人がおかれている点など、両氏が強調されている如く従来知られなかつたところである。まことに貴重な史料といわねばならない。中央研究院の明清檔案の中には、この外にも老満文の資料が現に多数存在する。それらは乾隆朝重鈔の満文老檔に収録されなかつたものであるから、出来るだけ早い機会にその全容を紹介して頂きたいものと思う。

さて広祿・李学智両氏の本論文は、原檔の存在を伝え、その内容を始めて詳細に紹介したもので、満文老檔の研究上劃期的な業績といえよう。難解な原檔を判読整理する労苦の容易でないことは推察するに余りあるが、次回には太宗朝の分について、研究成果を発表して頂きたいと思う。そして是非両氏に望みたいのは、原檔の中の蒙古文の個所など満文老檔と相違のある部分と原檔残欠の個所は、全部網羅的に列挙すること、重複のため満文老檔に重鈔されなかつた原檔は全文摹写すること、また乾隆重鈔の際に用いられなかつた三冊の原檔も全冊紹介することである。そして経費の関係等で困難はあろうが、原檔四十冊全部の写真版を公刊して頂くことを故宮博物院当局に特にお願いする次第である。

(中国東亞學術研究計劃委員會年報第四期所載一九六五年六月刊)

劉鳳翰 著

## 袁世凱与戊戌政変

菊池 貴 晴

本書は、戊戌政変の勃発に関連する袁世凱の密告の有無、

批評と紹介 菊池

およびその周辺を、梁啓超の『戊戌政変記』、袁世凱の『戊戌日記』の考証を中心として究明し、事実の真相を確認しようとするいくつかの論文から構成されている。論文題目は次のとおりである。

- ①、梁啓超『戊戌政変記』考異
- ②、清議報一至十期対『戊戌政変記』的刊載
- ③、戊戌政変前後畿輔兵力的分佈
- ④、袁世凱『戊戌日記』考訂
- ⑤、与蕭一山先生談『戊戌政変の真相』

ここではスペースの関係上、主に①、④、⑤の順に簡単に内容を紹介し、併せてそれに対する私見をのべてみたい。

### I、梁啓超『戊戌政変記』考異

梁啓超の『戊戌政変記』には、三種の版本があることは周知のとおりである。日本初印本(光緒二十四年?刊)、上海中華書局欽冰室合集本(民国二十五年三月刊)、香港友方圖書公司十六次版本(民国四十七年一月初刊)である。

著者の比較検討の結果では、合集本は初印本を大幅に改訂しているが、完全に削除された部分は二三ヶ所、改訂された部分は実に九二ヶ所に及んでいるという。その部分は全部掲げられているが、梁啓超が感情の激するままに書いたと思われる西太后、守旧派大臣痛罵のところ、保皇主義や君主立憲体制を意識的に宣伝したと思われる箇所、時局論のうち主観